



レジデントの情景

MY LIFE IN NEW YORK

11

Onwards & Upwards!

白 賢 Hyun Baek
ニューヨーク大学歯学部補綴科大学院

最終学年、最後のサマーセッションが始まって一週間が経過した。バケーション明けでいざ大学に戻ってみると、自分のロッカーとユニット（治療のチェア）がすでに新しいレジデントに勝手に割り振られていて、いきなり居場所そのものが消滅してしまっていた。ディレクターに状況を伝えると、「お前のロッカーとユニットはもうない。新入生に譲れ」と理解不明なことを言うので、「朝から晩まで5人も患者さんのアポが入っている、自分が移動する理由は?」「ロッカーがなくてどうやって模型を保管しておけばいいのだ」と半分呆れていると、新しいレジデント、クウェートから来たアリが「自分はまだ患者も少ないから、9月までは自分が空いているチェアを見つけて診療をする」と申し出てくれたので、その場は丸く収まった。さらにトランスファーされたケースも新しいレジデントとダブルブッキングされており、その対応にも追われている。

もうこんなことにはすっかり慣れてしまい、いちいちメゲたり、怒ったりもしてられない。とにかくリアイアメントを終らせなければならぬので、今までにないほど診療が忙しく、午前には2人、午後は3人と目一杯アポイントで埋まっている。体力的にはかなりキツイことは間違いないが、授業

や論文抄読、プレゼンの準備などがないので、精神的にはかなり余裕がある。いくら難症例、フルマウスが多い、患者の要求が日本とは比較できないほど高いとはいえ、臨床だけならなんとかなる。こうしてみると、体を休めるための週末をすべて論文を読むのに費やし、平日は診療を挟んで行われる授業（聞&ディスカッション）が、相当な負荷になっていたのだという事実気づく。

トピックプレゼンテーション

今年の補綴科レジデントは男性2名、女性7名、インターナショナルレジデント2名の構成になっている。まだ患者さんの治療が始まっておらず、コンサルテーションのみだからか、少し時間を持て余しているようで、少し遠慮がちだ。彼らの振る舞いと比べて、われわれの態度のなんと不躰なことか…とはいえ、彼らも9月になれば、目をギラつかせ血走らせながら、患者さん獲得のための争奪戦を繰り広げることになるだろう。そうしなければ、ここでは生き残っていけないのだから。

他大学の補綴科プログラムはどうなっているのか不明だが、ニューヨーク大学補綴科では3年目の最後まで週4回、朝8時からレクチャーがびっしり詰まっている。レジデント3年目最

後の授業はトピックプレゼンテーションと言い、各レジデントが自分の興味があるFixed prosthodonticsのトピックについて調べ、プレゼンテーションするというもの。プレゼンテーションの最後を飾るのは、プエルトリコ出身のJPで、テーマは義歯用アタッチメント。プレゼンテーションの前日、JPにしては珍しく一日中緊張した様子。少しナーバスになっていたのか、どうしたのかと疑問に思っていたら、なんてことはない。昨夜、彼女にプロポーズすることになっていたのか、プレゼンテーションどころではなかったとか。さすがラム酒と海、彼女を愛する彼にふさわしい。プロポーズも無事OKだったらしく、今夜は晴れて歯科技工士のローマンが慰労の会を開催してくれた。場所はSOHOにあるイタリアンレストラン。ローマンの20年来の友人が経営するレストランらしく、洗練されていて、セレクトな感じのニューヨークerたちで賑わっていた。フランス出身のフランスソワが選んだ赤ワインがこれまた素晴らしく、つい飲み過ぎてしまった。

治療費のトラブル

あと2カ月でプログラム終了という間際になって、担当している患者さんの治療費のことで大騒ぎになってい

る。1カ月前に治療費の支払いをマネージャーのジョアンに確認した時点では残金が600\$だったので、そのまま患者さんに伝えたのだが、2週間前にもう一人のマネージャーのアリソンに確認したら残金が4,000\$になっていたのだ。そのまま患者さんに伝えてしまった私も悪かったのだが、600\$と伝えた時点で少しおかしいと思い直してしつこく確認すべきだったのだろう。4,000\$と言われた時も、いくらなんでもそれはおかしいと何度も確認したが、アリソンが不機嫌になってしまったので、それ以上追求するのはやめた。

仕方なく患者さんにそのままSNSで伝えたところ、予想どおり患者さんが激怒。「お前ら、俺の金を盗んだな！警察に訴えてやる。お前ら他の患者でも同じようなことをしているのか。俺の従姉はハフィントンポストでリポーターをしているんだ。マスコミで取り上げてやるからな。計算ミスしたマネージャーはクビにしてやる！」と言った調子でひどく怒っている。この状況をジョアンに説明し、改めて計算し直すと治療費の残額が正確には2,500\$だったことが判明した。今年の1月から電子カルテに変更になったこともあり、治療費の計算も患者さんごとに計算し直さなければならず、会計もここ数カ月は混乱しており、情状酌量の余地も少しはあるかもしれないが、いくらなんでもひどい。

早く何とかしてくれないと、治療も進まない。患者さんは「そもそも受付に電話しても出ないし、お前らどうなっているんだ。お前もクビだ！」と私も完全に巻き込まれている状態。こちらの手違いに気づいたジョアンがすぐに患者さんに電話し、正確な残金を伝えたものの、患者さんは納得していない。結局、マネージャーでは手に負

米国歯科専門医教育の最前線 Postgraduate-Programで教えている「診査・診断」

小誌で連載中の二人が、アメリカの歯科専門医養成大学院で教えている「診査・診断」、そして専門医教育の本質とは何か、を伝える一日セミナー

講演 「USC 歯内療法科では何をどう教えているのか？」
USC Endo が大切にしている診査・診断」……松浦 顕
「NYU 補綴科で教えている診査・診断について
～私が学んだ補綴臨床の真髄～」……白 賢

日時 12月27日(日) 10:00～

場所 都内 参加費 1万円(昼食代込み、先着40名)

<申し込み・連絡先> nyupgpros2015@gmail.com (白宛) まで

えないということになり、来週ディレクターと会計責任者、患者さんで面会する予定だったが、またまた手違いが生じた。患者さんはディレクターからの電話と謝罪を3日間ほど待っていたのだが、一人の患者さんのために忙しいディレクターが謝罪の電話などするわけもなく、それでまた患者さんは激怒し、面会の日程も決められないでいる。

何でも自己責任で済ませようとするのは、この国、特にこの街では自己防衛本能、手段として仕方ない部分もあるが、もう少しなんとかならないのか。ジョアンは「あんな失礼で短気な患者とは話したくない。あなたが面会のアポイントを調整してね」と、こちらに丸投げ。アリソンは「あんな面倒くさい患者を連れてくるな」と、こちらも八つ当たり。だが、こちらに非があるのは確実である。マネージャーからは「しばらく患者と直接やりとりをするな」と忠告されたが、患者さんから怒りのメールが届いた時点で、私は謝罪した。この後どうなるのかはわからないが、とりえず私個人が考える誠意、誠実な対応はすべきだと思っており、アメリカで訴訟が多いのも、こう

した無責任な対応が重なったことによる、感情のもつれが多いような気がしているからだ。そもそも本当に治療費を盗んだとしたら問題だが、基本的に何かしでかした訳でもなく、初めからこちらが適切に対応していたら起こりえなかったことである。とにかくこれからも誠心誠意対応していかなければなるまい。しかしどんな時も、笑顔を忘れてはいけない。何が起ころとも清濁すべて飲み込んで、笑い飛ばして前に進んでいく。それがここで生き抜いていくための、ニューヨークerとしてのマインドセットなのだ。ニューヨーク大学補綴科専門医課程のレジデントという聞こえはいいかもしれないが、こうしたカオス的な状況こそが留学生活のリアリティだと言える。いずれにせよ、よい経験になった。

日本に帰国後、自分のクリニックでは治療を始める前の診査診断はもちろん、治療計画の承諾、計画書へのサイン等は必ずもらうつもりでいるのは言うまでもない。

本連載の裏話などを知りたい方は、
下記のブログを Check!
<http://nyupgpros2015.blogspot.com>